食とは(12)　続・石鹸と合成洗剤　　鈴木斉観（斉観堂鍼灸･気功治療院院長）

「石鹸と合成洗剤」の問題を文明のあり方につながるものと考えられないのは、その枝葉末節のみを見て、その根本を見ていないからである。

紀元前3000年、ローマ時代の初期にサポーの丘でいけにえの羊を焼いて神に供える風習があった。したたり落ちた脂と木灰（アルカリ分）が混じって自然に石鹸ができた。この史実に限らず、山火事などがあれば、逃げ遅れた動物の脂と木灰が反応して、石鹸が自然にできる事は想像に難くない。石鹸、つまり化学的な名前としての脂肪酸ナトリウムや脂肪酸カリウムは自然に存在する化学物質である。現在、人類はそれを真似て、人工的に「化学物質」として作っているわけである。

一方、合成洗剤は第一次世界大戦中のドイツで、食糧不足から食糧となる油脂を原料としない洗剤を開発しようとした結果、生まれた。最初から近代科学による高度な人工物、「化学物質」として誕生したのである。以後、様々な合成界面活性剤が開発されたが、そうした本質が変わったわけではない。生分解性が高くなったといっても、下水処理場での高度な微生物分解を前提とするわけで、自然に戻す為にも人工的な処理を必要とする。

そうした石鹸と合成洗剤の質の違いの重要性に気づかず、同じ「化学物質」という名の下に同列に判断し、そこに終始しようとするのは間違いである。

この問題の根本はこの質の違いに関わることである。毒性があるかないかという見方ではなく、その化学物質の自然との親和性はどうかという見方が必要である。その親和性の低さの中に、科学的には明確にできない慢性的な毒性や複合的な毒性が隠されている。

物質を自然界では通常受けないような人工的な環境で分解し、自然界に存在しない形に合成された合成洗剤は、遺伝子組み換え作物などと同じく《自然の支配》を軸とした文明に属する。一方、石鹸は様々な職人が生み出す伝統製品と同じく《自然と調和》した文明に属する。

《自然の支配》を軸としたこれまでの文明のあり方を反省し、《自然と調和》した文明を目指そうとするならば、合成洗剤の使用が当たり前の現在の状況を変えていかなければならない。

有機農産物や伝統的製法の加工品を食べようとする選択が、単に残留農薬や添加物の毒性から自分や家族の健康を守る為だけだとしたら、それは利己主義に過ぎない。意識されないにしても、その選択の根底に《自然の支配》を軸とするこれまでの文明への反省と《自然と調和》する文明への志向があったのではなかったのか。そこのところを今改めて意識しないといけない状況になって来ている。

石鹸も使い過ぎれば、自然の循環を危うくする。使い過ぎを促す「過剰な清潔感」は《自然の支配》の文明に属する。

「欧米では食器洗い器が普及していて、その為に液体洗剤として合成洗剤が用いられています。また直接手に触れないわけなので、手にやさしい洗剤が求められていないようです。…。便利さを過剰に追求し、利己的な欧米文化を見習う必要はないでしょう。」(②)

過剰な便利さの追求は過剰な機械化を生み、合成洗剤の使用量を増加させている。合成洗剤は機械洗浄に向き、また洗浄液として機械に組み込みやすい。過剰な便利さも過剰な機械化も《自然の支配》の文明に属することは言うまでもない。

現代に蔓延する化学物質の問題を考える場合はもちろん、現代における様々な文化を考える上でも、「石鹸と合成洗剤」の問題はモデルとなり得るはずである。

本末転倒の論述の多い昨今である。腹で深く息をし、足を地に着け、頭を過熱せず考えることである。

（2003年9月白露）

註： ここでは「石鹸」は界面活性剤としての石けん、「合成洗剤」は合成界面活性剤を指す。

参考資料： ①『はて・なぜ・どうしてクイズ石けんと合成洗剤』(長谷川治著)　②『石けん・洗剤100の知識』(左巻建男監修)